

【佐藤氏】 須田さん、いかがですか。

【須田氏】 私はもっと多いです。30ぐらい？

【佐藤氏】 残念！140以上の国の人々が住んでいます。日本全体でいいますと200万人の外国人が住んでいるわけなんです。国籍数は188です。今、国連加盟国192ですね。その国のほとんどの人たちがもう日本に住んでいる時代になっているわけです。わざわざ村をつくらなくても、私たちが気がついていないかもしれないんですけど、たくさんの人たちがこの日本にもう住んでいる実情がございます。この外国人の居住数というのは年々増えてきているわけですね。

ですから、私たちは、隣に住んでいる外国の人たちといかに交流を深めていくかということを考えてもいい時期になっていると思います。その職種はさまざまですよ。外交官であったり、大学の先生であったり、あるいは外国から来て日本の企業で働く人であったり、外資系の企業に働く人であったり、ダンサーであったり、工場労働者であったり、また、日本人の配偶者として日本に住んでいる外国の人たちも増えているわけなんです。「多文化共生」ということがよく言われるんですけど、これからそういった人たちといかに日本の社会をつくっていくかということは、私たちが考えていかなくはない大きな課題であるというふうに思います。

私、名古屋大学によく行くんですけど、名古屋大学には、留学生の方たちが今約1,200人いますけれども、70カ国以上の人たちがもう既にあのキャンパスの中で一緒に勉強をしているわけですね。実は、私も数年前まで大学院で一緒に机を並べて留学生たちと勉強をしていたわけなんですけれども、いろいろの国から来た留学生たちはほんとうによく勉強をするんです。モンゴルから来た留学生、インドネシアから来た留学生、中国、韓国、カンボジア、ベトナムなどほんとうにさまざまな国の人たちがこの日本で——なかなか過酷な生活状況だと思うんですけども——一生懸命勉強をして論文を書いている、その姿を見たときに、果たして私たちはその留学生たちに優しい手を差し伸べてあげているかなというふうにも思いました。

欧米から来た留学生たちは、結構いいバイトの口があった

りして、生活もそれほど苦しくはないんですけども、ほんとうにアジアの国から来た留学生たちは、アルバイトをするのでもなかなか大変なんですね。そういった人たちからその国の文化を教えてもらうということもできるでしょうし、自分のうちに招いてあげるということもできると思います。私の家でホームパーティーをやったんですけども、そのとき、10カ国ぐらいの留学生が来てくれました。「私は名古屋大学に来て数年たつけれども、日本人の家に呼ばれたのは初めて」という人たちもいたので、そういった人たちに私たちが何をしてあげられるかという視点を持つこともできるのではないかなと思います。

それから、私、「愛知善意ガイドネットワーク」——善意、グッドウィルです——というボランティアで、愛知県に来た外国の人たちに観光地をガイドするNPO法人を立ち上げて、副理事長をしております。ほんとうに心優しいメンバーが100人ぐらいいて活動しております。つい先日、私の受け持っている授業の一環なんですけれども、金城学院大学の留学生たちを緑区の有松へ連れていきまして、そこで有松のことに詳しい人たちがガイドをしてくれました。そして、一緒に絞りのハンカチをつくったんですね。そうしたら、いろんな国の留学生たちが夢中になって糸と針をもって絞りをつくって、最後、藍の液に浸して、洗濯機で洗って乾かすまで喜んで作業をしておりました。ある留学生は、自分の国へ帰ったらおばあちゃんにあげるのとか、お母さんに見せてあげると言っておりました。そうやって体験を通して留学生たちに日本の伝統文化を学んでもらう、とてもよい機会となりました。そのように、共同作業を通して、文化にふれてもらい、お互いの文化を尊重しあえるような社会ができるとよいと思います。

【小出氏】 ありがとうございます。

ここに住んでいる人たちとほんとうに仲よくする、それからここに住んでいる人たちが住みやすくする町というのも、今日は国交省のお役人の方もたくさんおられると思うんですけども、道路標識に一応漢字で書いてローマ字で小さく書いてあるんですね。あれは、僕もいろんな人に聞いたら、車を運転していて見えない。単なるアリバイづくりでローマ字

が書いてあるだけで、あれは実態見えないんですよ。

だから、例えば香港へ行かれるとすぐわかると思うんですが、漢字とローマ字が同じ大きさで書いてありますね。だから、もしここに住んでいる人たちの外国の人たちのためのと思うならば、道路標識は、やっぱり漢字とローマ字の字は全く同じ大きさにすべきだと思いますね。初めてここに住んでも迷わないとか。あれは、僕らでも車を運転しては見えないです。漢字を知っているから僕らはすぐわかるけれども、漢字をわからない人は絶対わからないですね。文句を言うと、書いてあるじゃないかと、アライ文書というのはお役所の得意わざですけども、でもぜひこれは大きくしていただきたいというような部分から、ほんとうにここに住んでいる人たちが住みやすいというような町づくりができ上がったらいなという感じがします。

あと、マリさんに、通常交流というと、いろんなものが生まれて、英語でアイデンティティーという単語がありますね。それで字引を引いても、自己同一化とか日本語になっていないですよ。ということは、日本語にもともとこういう概念がなかった。それでも、このアイデンティティーというのは、いろんな人と交流することによって、一体自分は何だろうというのが生まれてくる概念だと思うんですね。

ある外国人の学者で日本を勉強している人に、アイデンティティーの日本語で一番正しい言葉は魂じゃないですかと言われたことがあるんですけども、やっぱり日本人のアイデンティティーというのは、日本人としての魂でしょう。なるほどと思ったんですけども、少なくとも自己同一化という日本語よりははるかにわかると思うんですけども、交流時代が生んでくるそういうアイデンティティーというのが、



必ず多かれ少なかれ生まれてくると思うんですけども、それについての行方といいますか、そういうのがどういうふうにも生まれたいのか。妙なナショナリズムになっても困ると思うんですけども、ということについて話していただければありがたいんですが。事前の質問は全くなかったですけども。

【クリスティーン氏】 難しいあれですけど、私自身、アイデンティティー・クライシスという危機って1回あったことがあるんですね。それは、日本に最初に来たときに、私はすごく日本の文化が好きで、私は、母は日本人ですけど、父はイタリア系のアメリカ人で、イタリアの文化プラス、アメリカの社会とアメリカの文化の家庭の中で、それプラス、うちの母の日本の文化がそこにあって、だけど、アメリカ国籍という1つの傘の中のくくりで、私自身はアメリカ人でありながら、国籍でありながら、自分の家庭の文化はジャパニーズであったり、イタリアンであったりということで自分で何となく理解していたんですね。

日本に来たら、私は日本人であり、イタリア人でもあり、アメリカ人でもありということで、私自身は複数の文化を持つ人間だと思っていたところ、日本人は私を日本人として見てくれないんですね。一番見てくれなかったのがうちの親戚だったんですよ。あなたは外人だからと自分と血が繋がっている人に言われちゃうとどきっとするんですね。

うちの母の場合は、とにかくうちの父と結婚して、日本人だけども、うちのイタリアの兄弟は、うちの母をイタリア人同様に、私たちの家族の一人だということで引き込んでくれているから、うちの母も、もしかしたらうちの父以上にイタリア人になっちゃったかもしれないんですが、ですけど、私自身が、じゃ、私は何なのということで非常に悩んだ時期があるんです。ですから、私はハーフではなくダブルだという実感もありますし、自分が知っているいろんな文化をまた重ねちゃうと、トリプルであったり、クワドラルであったりとだんだん倍の原理になっちゃうんですね。

私は、おそらく外国の方々が日本に来て一番悩むことは、結局少数派になったときに自分たちの居場所がなくて困ると。ですから、交流するときの一番つらいところは何かというと、先ほども佐藤さんからお話がありましたように、欧米の方だ



ったらば入りやすいんですよ。なぜかという、あこがれられている部分があるから日本の方はすぐ引き込んでくれる。だけど、アジアの方だったりとか、または自分と似たような雰囲気の方で別の国籍を持っている方だと、逆にあんまり仲よくしてさしあげない。むしろ、ちょっと下を見てしまうような部分があって、それは人間というのはみんな感じ取れるんですよ。

ですから、そういうところの中で、私は、先ほど小出さんがすごくすばらしいことをおっしゃったと思ったのが、国際色豊かな都市だけど国際都市ではないと。やはりそうだと思うんですね。だけど、名古屋だけではなく、東京も含めてそうではなく、すべて日本の都市がそうだと思うのは、国がそうだからだと思うんですね。ですから、やはり国から変えていかなければいけないのは、例えばアメリカで外国人が来ると、もちろん差別はたくさんあります。黒人と白人との差別もあるわけです。ですけど、国としての差別はないんですよ。

だから、海外から来た人たちのためには、英語が学べる場所がたくさんあるんです。どこへ行っても、自分が生活した地域では、まず即英語を勉強しなさいと言われて、移民される方も、外から来た方は、地元のパブリックスクールに入って、そこで英語を学ぶこともできますし、第2カ国語として英語を学ぶ人のためには、文化と、それこそアメリカの憲法じゃないですけど、そういうことをきちっと教えた方がいいですね。早くに中に同化して、それでアメリカ人と同じような生活をしてほしいということが表向きの一応大義名分があるので、それはまた、先ほども言いましたように、地域によってはもちろんすごく差別的なところもあればそうじゃない。だけど、そうじゃなく、ほんとうに引き入れようとする

のは地元の住民の方なんですね。自分たちが体験したことのないような文化から人が来たときに、この人と友達になってみたいと、おもしろい楽しい話がそこから生まれると。

私は、愛知県、また中部地区を見ていても、ほんとうにブラジルから来られた方々とか、もともと日本国籍を持って来られていた方々とか、または韓国の方、中国の方が来たときに、どれだけ日本人が彼らの文化を学ぼうとしているか、そして相手の文化を学ぶことによって、相手も自分の文化に誇りを持って、そして尊敬の念を持って相手とも接することができる、それがほんとうの交流だと思うんですね。してさしあげるだけではなくて、お互い知ることによって、お互いの誇りを保ち合える、尊厳を保ち合えるというところで。

その尊敬の念がお互いに生まれたところで、初めて自分のアイデンティティーに対する誇りと知識というものが出てくると思うので、私は何々人です、私は何々の文化から来ていますと。ですから、私は必ず、父がイタリア系のアメリカ人、母が日本人、そして国籍がアメリカでしたけれども、今は日本人ですというようにきちっと伝えるのは、自分にはこういうパーツが全部ありますということを知ってほしいし、私自身はそれに誇りを持っているし、私は、相手の持っている文化とアイデンティティーに対しても尊敬を示したいと思うからなんですね。

【小出氏】 ありがとうございます。

まさにいろんな交流をすることによって、人間というのは必ずアイデンティティーというものを感じて、それを感じると、やっぱり自分は日本人だということ、この日本の伝統を勉強しようと思うし、それに対して誇りを持つようとするし。今までアイデンティティーという単語が日本語になり得なかったのは、そういう交流のチャンスがないものだから、アイデンティティーを感じなくて済んできた民族だから、そういう言葉がなかったんだと思うんですけども、これからは、そういうものが生まれると、余計日本について知りたいという若者が出たらほんとうにすばらしいと思うんですけど。

それから、最後に、この交流の問題で、ぼんやりと、このままでいいかなと僕は思うのは、例えばあちこちで家庭内でも交流が希薄になっている日本の現状で、学校の中でも交流がなかなかうまくいっていない。その上に、果たして広域交

流とか外国との交流というのが大丈夫だろうか。例えば家庭内ですと、ずっと昔だと、暖房というのはいろいろしかなかったから、いやでも1カ所に集まってくる。テレビでも一家に1台しかなかったから、自然に集まってくる。でも最近では、それぞれ物を与えることによって、子供部屋にテレビがあるから子供は来ないとか、そういうことによって、家庭の中の交流自体を分断しているというので、それで親子の対話がなくなってしまう。

だから、別に今、子供たちが個別にやっているというのは、あれは西欧的な個人主義が確立したんじゃないなくて、物を与えられたことによってばらけただけだと思うんですけども、そういう新しいライフスタイル、その意味では、家庭内ではむしろ非交流的なライフスタイルが進んでいるというので、この問題というのは、もう一回、家庭の中とか地域とか学校とかという問題にまでかかわってくると思うんですね。交流というものをほんとうにまじめに考えると、こんなことでいいんだろうかみたいな状態を感じるんですけども、家庭内で交流がいかに大事か、その上に立って、地域、外国という順番だと思うんですけども、須田さん、こういう点はどうですかね。

【須田氏】 交流も観光も同じなんですけど、まず身の回りからということなんでしょうね。私は、いじめられた経験がありますからよくわかるんですけど、あれは集団から孤立することから始まるんですよ。周りから孤立していくと、その人間がいじめの対象になりますね。そうなりやすい人間がいるんですね。それが対象です。家庭も今おっしゃられたように、家族同志と十分対話をしているかと思ったら必ずしもしていませんね。それはいつでも対話できるからということがそこにあるんですね。

それから地元の観光資源に地元の方はあまり関心を持たないのです。私は京都の人間ですけど、金閣寺や銀閣寺を見ても別に何とも思わないし、第一とくに行こうと思いませんでした。焼けるまで僕は金閣寺に行ったことがなかったんですから。

地元にあるものを見ても、地元の人は、いつもそこにあるすばらしいものだという事はなかなかわからないんですよ。

ね。家族もそうだと思います。だから、交流も観光も全部そうですけど、まず身の回りからと、自分の隣の人との交流を始めることがまず大事なので、それであってこそ、初めて幅の広い交流ができるし、観光も、自分の町の観光資源を観光する心、それこそ交流マインドで見回すということから始まると私は思うんですね。

【小出氏】 自分の身の回りからというのは、私も新聞記者を長いことやっていまして、どうにも理解できないことが2つあるのは、国際平和が大事だといって叫んでいる人に限って、隣の家と戦争状態にある人がいる。人権が大事だといってきんきん言っている人に限って、嫌われ者が多いとか。人権というのは、やっぱり周りの人の立場を尊重することから始まると思うんですけども、だから、どうしても理念が飛んじゃうんですね。

だから、やっぱり本物を目指そうとするんだったら、ほんとうに身の回りから。世界平和が大事だったら、やっぱり身の回りから、隣の家と仲よくするのがまず最初ですけど、ほとんど境界線争い、あの人は変わっておるとかと言われておるケースがある。だから、そういうある種の虚構みたいなことをどれだけやっても実らないといえますか、そういう点で、ほんとうに身の回りから固めていくというのが大事だという感じがします。

そろそろ時間が参りましたけれども、佐藤さんとマリさん、最後に言い残すことをちょっとお願いします。

【佐藤氏】 私は、もう何度も映画の話をしているんですけども、その中の、ペルーから来た映画監督が豊川市に滞在して制作した1本の映画についてお話したいと思います。ペルーの人たちはたくさん豊川市にもいるわけですね。日系ペルーの人たちが工場労働者としているわけなんですけど、その映画の中でインタビューされたペルー人が次のように言っていました。「私はペルーではものを書く仕事をしていました。でも、愛知県に来たら、ただの工場労働者とか日本の人たちは見てくれない。だけれども、万博にペルーが参加し、豊川市とペルーがパートナーシップを組んだ一市町村一國フレンドシップ事業があったおかげで、ペルーはどんな文化があ



るかというふうに豊川市の方が僕に聞いてくれるようになった、ペルーの文化にも目を向けてくれた、非常にうれしい」ということを言っていたのです。

こうやって映画をつくるということは、非常にたくさんの方が発見できますし、また共同作業の中で見えるものがたくさんあります。毎日、中日新聞にははじめによる自殺ですとか、事件の報道があるんですけども、私は、映画ははじめをなくす特効薬になるんじゃないかなと思っております。万博のときには21カ国の映画監督と映画をつくったわけなんですけど、今度は、私たちは子供たちと映画をつくりたいというふうに思っています。

子供たちにある場所とテーマを与えて、シナリオを考えさせる。そして、その中の1本のシナリオを選んで、子供たちが映画監督にもなり、俳優にもなり、カメラマンにもなり、そして編集もする、そういう共同の作業の中で見えるものってたくさんあると思うんですね。そして、できれば外国籍の子供たちとも一緒に映画をつくれれば、国際的な感覚も養うことができるし、お互いを思いやる気持ちもできるのではないかなというふうに思っております。万博の成果として、映画がうまくできましたので、今度は子供たちとの映画づくりにますます頑張っていきたいと思っております。

【小出氏】 ありがとうございます。

それでは、マリさん。

【クリスティーヌ氏】 とにかく、やはり交流することがすごく大事なことで、交流したときに、ある意味では、どなたかのディナーパーティーに行ったのと同じだと思うんです

ね。お呼ばれたときに、例えば何か差し入れを持っていくとか、何か食卓で分かち合う食べ物があったときに、自分の文化というものをそこで分かち合うことができる、それが1つの交流の材料になると思うんですね。ですので、やはり自分がもし同じ日本人同士でも、自分の地域の文化をお互いに自慢し合ったり、または交流するための1つの材料にするとかということも含めて、ほかの国の方々だったらば、そういう文化を1つの酒のつまみにして、いろいろお話をするというのも大事だと思うんです。

それと、佐藤さんのように、万博が始まるということになったときに、こういうフィルムがあったらいいと思う、その1つの発想からスタートしたものが、これだけ広い大きい活動になったわけなんです。みんな一人一人そういう思いがあるはずですので、それをぜひこれから自分の地域のためにもそういう種を、自分たちから動いて、小さな動きからでも構いませんので、だれでもができることです。それをだんだん広げて大きくしていくということができる地域づくりにしていけば、私は、もっとこの交流も含めて地域も発展していくのではないかなと思います。

【小出氏】 ありがとうございます。

それじゃ、ほんとうに大トリで須田さんから一言だけお願いします。

【須田氏】 中部は、産業技術の中核圏域にならなきゃいけないということだけはだれもが言っております。また、これはおそらく世論でしょう。しかし、日本の国際交流中核圏域にならなきゃいけないというのも、中部の大きな使命だと私は思います。そのためには、やはり先般の万博の効果をフルに生かしていく。さっきお話がありましたけれども、万博のおかげで中部や名古屋の知名度は国際的にも相当高まったと思います。忘れられないうちに、中部や愛知や名古屋を覚えているうちに世界の人に呼びかけて、もう一遍、ここでミニ万博を毎年民間の手で開くぐらいのつもりで、世界の人との交流を進めて交流中核になろうではありませんか。それが私どもの大事な使命ではないかと思っております。

【小出氏】 ありがとうございます。

ちょうど5時になりましたけれども、このシンポジウムは交流というものをテーマにして、この地域をどういうふうにしていったらいいだろうというので、4人でいろんな考えを述べました。シンポジウムとか、それから講演会というのは、ほんとうに初めから終わりまで全部覚えている人というのはいないと私は思いますので、さまざまな意見が出た中の言葉の断片でも皆様のご記憶に若干でも残れば、それで何とか役割は果たせたのではないかというふうに考えております。

大変長時間にわたって、ご清聴ほんとうにありがとうございました。どうもありがとうございました。